

三鷹市 吉村昭 書斎

MITAKA CITY
YOSHIMURA AKIRA
WRITING ROOM



吉村昭（1927―2006）は、昭和44（1969）年に三鷹市井の頭に家族とともに転入しました。それまで住んでいた北多摩郡保谷町（現 西東京市）の家が、道路の建設予定地に入ったため転居を決意。妻で作家の津村節子が移転先を探し、この地に新居を定めました。

この家には、夫婦のそれぞれの書斎がありましたが、十年も暮らす間に吉村の書斎は執筆資料や書籍で溢れかえってしまいました。そのため、自宅の敷地内に6畳の書斎と4畳半の茶室から成る10坪の離れを建てます。茶室は、茶道に親しむ津村の希望で備えられました。

取材で家を留守にすることも多かった吉村ですが、外泊は基本2泊までとし、旅先から帰るとすぐに書斎で執筆に励みました。書斎の回転椅子は、草を張り替えながら終生愛用し、この椅子に座って机に向かうと、煩わしいことも忘れて落ち着いた気分になったといいます。のちに吉村は、書斎を「この世で一番安らぐ場所」*と表現し、深い愛着を示しました。

*「書架 作家吉村昭さん」『産経新聞』平成11年5月31日



母屋の頃の書斎（提供 吉村昭記念文学館）



書齋で執筆する吉村昭（提供 文藝春秋）

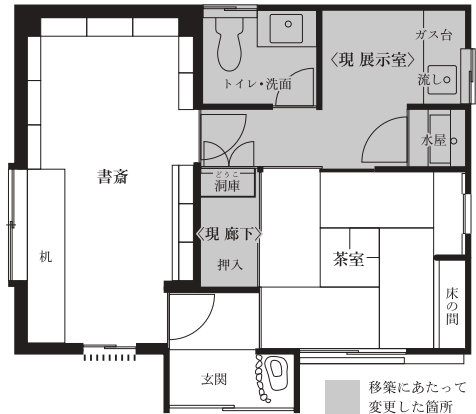
書齋には吉村のこだわりが随所に見受けられます。書籍で埋め尽くされた本棚は部屋の四方を囲み、造り付けの机はたくさん資料を置くために横幅が2m60cmに設えられています。机右手には、病院のカルテ棚を参考にした棚があり、小説のゲラ、書きかけの原稿、催し物の案内状やメモ、文房具類を収納していました。

徹底した調査をするために増えていく資料を、吉村は作品を書き終えるごとに仕分け、今後見返さないと判断した書籍は古書市場に戻しました。ある古書店の店主から、古書は必要としている人のために市場に戻すべきだと教わり、それを自身の流儀としたためです。

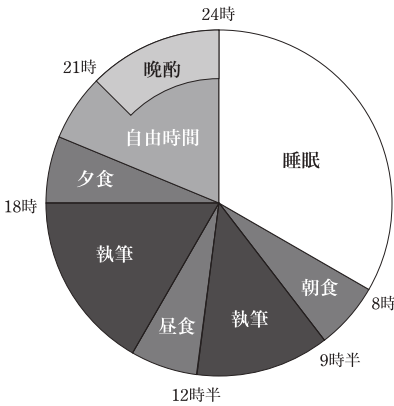
吉村は、毎朝8時に起きて30分後に朝食をとると、9時半には書齋に向かいました。12時半に母屋に戻って昼食を済ますと、再び午後6時まで書齋で執筆に励みます。夕食後は夜9時からお酒を楽しむ、0時には就寝。これが吉村の日々の習慣でした。取材での外出をのぞく毎日を執筆にあて、決まった時間に書齋に向かうことから、吉村は書齋に「出勤」*していたと津村は語っています。

*「広報みたか」平成22年1月10号「新春対談」

移築前の書齋の間取り



一日のスケジュール



三鷹市 吉村昭 書齋

MITAKA CITY
YOSHIMURA AKIRA
WRITING ROOM

〒181-0001
東京都三鷹市井の頭3-3-17
TEL:0422-26-7500
HP: <https://mitaka-sportsandculture.or.jp/yoshimura/>

京王井の頭線井の頭公園駅より徒歩3分
右のQRコードからアクセス！



吉村昭(1998年撮影)

私にとって最も気持ちが安まるのは書齋で、死んだ折には机の上に骨壺を納骨時までのせておいて欲しい、と家人に言っている。

〔長崎と私「私の好きな悪い癖」(平成15年 講談社文庫)〕

平成18(2006)年7月31日、吉村は闘病の末に自宅で79歳の生涯を閉じます。書齋の机には、死の直前まで推敲を重ねた「死顔」の原稿が残されていました。遺骨は本人の希望により、一年間この書齋の机の上に置かれました。

その後も書齋は家族によって大切に保存され、令和6(2024)年3月に三鷹市が吉村の全うした作家人生と業績を讃えてこれを移築し、「三鷹市吉村昭書齋」として整備、公開するに至りました。



公益財団法人 三鷹市スポーツと文化財団
Mitaka City Sports and Culture Foundation